

### 3.1. 弥勒菩薩に魅せられた（中国敦煌石窟訪問、一九九九年四月）

公務の後に出張先の地で私的な計画ができるのは大きな楽しみである。そしてその旅先が歴史ある土地だと楽しみは倍加する。国連に来てそれが地球規模になった。北京での公務は心躍るものだった。そのあと西安、敦煌まで飛ぶことにしていた。精華大学での公務最終日に訪ねた大学の実験施設からは万里の長城八達嶺<sup>1</sup>まで少し足を伸ばした。北京での最終日は「書」の小道具を求めて琉璃廠を歩いた。

中国国内の旅行は公務相手の精華大学の教授が手配してくれた。いよいよ私的旅行の始まりである。家内は西安で日本から合流することになった。今回の最終目標地は敦煌の石窟。中継点が西安。日本文化の多くがここに始まる。敦煌はかなりの遠地だが「行ける時に行こう」と思い切って休暇を取った。

四月二十四日、北京からその西安に飛ぶ。西安、かつての長安は訪れたいと長年思っていた。「書」に関心を持ってから一層その気持ちが強い。もちろん平城京、平安京の原型でありシルクロードの出発点でもある。二時間で到着。一時間後に上海から到着の家内と合流してホテルへガイドの「韓」さんが案内してくれる。流暢に日本語を操る。

翌日は碑林博物館で時間をとった。見ていて飽きなかった。本でしか知らない顔真卿や懷素といった名筆家の字を碑の形であるが直接目にして感激した。そこで購入した拓本が今も目を楽しませてくれる。大雁塔では「大唐三蔵聖教序」碑文の実物を目にした。ちょ遂良の字である。寺子屋で苦労した臨書を思い出し、二ヶ月前のウィーンでの「書展」<sup>2</sup>を思い起こす。翌日は始皇帝の兵馬俑、半坡遺跡、楊貴妃の華清池、翌々日は郊外の王墓を訪ねる。霍去病や楊貴妃の墓地もあった。見たいものは他にも多いが、「西安ならまた来られる、今回は敦煌に焦点を」と先を急ぎたくなる。

四月二十八日夕方その敦煌に向かう<sup>3</sup>。空港ビルから新疆航空の機体まで歩いて二十人乗りほどのプロペラ機に乗り込む。機体近くに自転車のあるのがいかにも中国らしい。乗務員が「急げ」と手を振っている。乗り込むと同時に動き出す。機内誌で中国の地図を眺める。この飛行機は敦煌から更にウルムチへ飛ぶ。随分西まで来たなと感慨に耽る。敦煌では莫高窟の千佛洞がお目当てである。奈良法隆寺の原点と称される飛天の壁画や玄奘法師が眼にした仏教芸術を自分も見ると近づくとつれて興奮が高まった。機上から見える地は次第に砂漠になり、荒涼とした空間が広がる。ゴビ砂漠だ。この道を玄奘法師<sup>4</sup>が歩いたのか、連れの沙悟浄や孫悟空のモデルは何だったのだろう。着陸した空港は小さい。黄色い土で固めて造ったような空港建物の上に建てられた「敦煌」の二字の文字が夕陽に眩しく見える。



<sup>1</sup> かつて十五年ほど前に訪ねた函谷関（？）に比べて観光地化が進んでいた。軒を連ねるみやげ物店、カラフルで豊富な品々、吹っかける売り子に時の流れを見た。

<sup>2</sup> この年二月始めに「日本書画三人展」をウィーン国連内で開いた。日本から書友の布村麗泉さんがはるばる参加してくれた。北京の琉璃廠ではその麗泉さんへの手土産に、自分の思い出と共に落款用の印材を求めた。

<sup>3</sup> 敦煌はとても遠く、行けないと思っていた。が、日立社内誌「ばんぼん」で、教え子を訪ねた先輩の紀行文をかつて目にして以来、いつかはと心に描いていた。それが現実化してきて嬉しかった。

<sup>4</sup> 玄奘法師は僧であると同時に、優れた外交官であり探検家だった。柔な体でこんな旅はできない。

出迎いのガイドと早速ホテル敦煌で打ち合わせ。お目当てのハイライト莫高窟千佛洞の時間を丸一日とってもらおう。翌朝の時間を決めてこちらは遅い夕食<sup>5</sup>。

莫高窟は敦煌石窟<sup>6</sup>の代表。期待は裏切られなかった。4世紀から1000年に渡って断崖に穿たれた祠は



1000を越す。千佛洞といわれる所以である。紀元前後から仏教がこの地を通して中国へ、さらには朝鮮、日本へと伝えられて行く。そこに多くの僧が集まりこの祠を穿った。車で近づくにつれて山肌に穿たれた多くの洞が遠景に見えてくる。格子状の窓にも、蟻の家の断面にも見える。その数やはり1000か。

公式ガイドの案内で域内に行く。洞が続く。唐代の菩薩に素晴らしいものが多い。蓮華模様の天井画、三世の連像など見飽きない。法隆寺壁画の原型がこれか、

と見つめる。偶像を作らなかった仏教が仏陀を人の形で表現し始めた初期の素朴な仏像達。唐代のふくよかな菩薩像。飛天の舞う壁画。洞穴は撮影禁止なので、その分網膜に残そうと真剣に見た。奈良を再び訪ねようと心に誓う。いつまでも佇む私をガイドと家内が外で待っている。

次々と洞が続く。塑像。壁画。よくもこんなに彫ったものだ。彫った人達の心を想像し、時の長さ、時の経過を思う。どれを持っていっても日本では展示会の目玉として人の目を集めるだろう。NHKの「シルクロード」を思い出す。実見はその印象を吹き飛ばす十分な迫力を持つ。どの洞でも息を呑む。幸せだった。ある洞では修復作業が進められており、ある洞では記録映画の撮影器具が林立していた。

中央の九十六窟は莫高窟のシンボリック建物。中の大仏は東大寺大仏よりも大きい。未公開、修復中の洞も多く、別料金で入る洞もある。料金はともかく、公開の窟だけでも自由に時間をかけて見歩きたいと思うが、ガイドは先を急ぎたがる。

何人の僧がここで鑿を振るい、瞑想したか。これだけの石窟群に皇帝の陵や西洋の王墓に聞くような奴隷の逸話がまつわっていないのはやはり宗教だからか。キリスト教の寺院や遺跡では感じ得ない安心と落ち着きが得られておだやかな気分になる。



特筆すべきは二百七十五窟の弥勒菩薩だった。正面の本尊に向かって左、目線より少し上の壁の窪みに彫られている約80cmの座像。足が止まってしまった。こんな笑顔があるのだろうか。柔らかな微笑み、なんぴとをも許す慈愛に満ちた顔はダイヤより輝いて見えた。永遠の恋人だった。この笑顔に接して敦煌

<sup>5</sup> ビールを口にする家内の前で私はウーロン茶を飲んでいて、二ヶ月前にマドリッドで暴漢に遭い、声帯を損傷して酒断ち中だった。

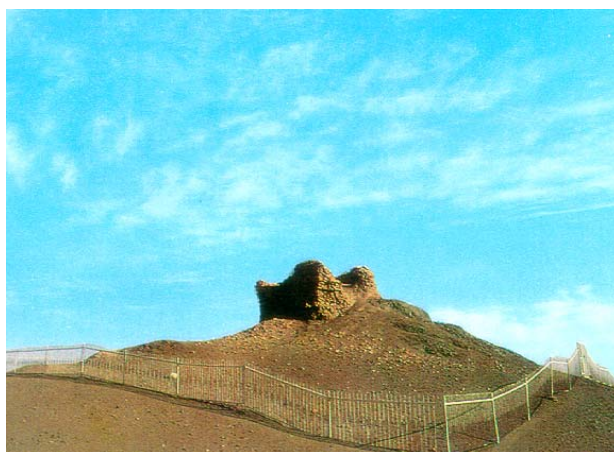
<sup>6</sup> 再発見のきっかけは二十世紀初頭、イギリス人探検家スタインが古文書、絵画数千点を只同然の価格で買い取って持ち帰ったことだった。貴重なものが保存できたのだからそれは赦すでしょう。壁画をセロテープで剥がし取ったというアメリカ人旅行客には心底腹が立つ。

に来た甲斐があったと思った。こんな笑顔をどこかで目にした。いつ、どこでだったろう。母だろうか、恋人だろうか。どんな修行僧が彫ったのだろうか。できるものなら自分でも彫ってみたいと思った。写真の撮れないのが残念だった。この菩薩の写った公式ガイドを必死に探したが見当たらなかった。本尊を挟んで左右の壁に座す六体の交脚弥勒は敦煌でも初期の作品らしい。京都中宮寺の思惟菩薩と同型の菩薩は残念ながら右手が欠損している。

二百七十五窟を出てさらに歩く。が、その後訪ねた洞の記憶がない。あまりにあの弥勒菩薩の印象が強かったのだろう。結局訪れた洞は僅か二十ほど。臉の底に残る映像を思い出して石窟を離れてもしばらくは無口が続く。自分の世界に浸っていた。いつの日かぜひもう一度訪ねたいと思った。

夕刻、鳴沙山に登る。街の反対側へ車で移動。標高差百mほどの砂山。裸足で登る。夕陽が美しい。砂漠には夕陽が似合うのか。アラビアのロレンスを思い、アブダビ郊外の砂漠で見た砂紋、大きな真っ赤な夕日を思い起こす。見下ろすと不枯のオアシス月牙泉がある。そこに小さな人間の世界があった。パゴダが目を惹く。その月牙泉を目指して雪山のグリセール感覚で砂山の斜面を降りる。振り返ると自分のトレールがはっきり見える。砂漠の中のオアシス、大きくはないがこれが古来多くの生命を生かしてきたのだ。人も、動物も、まわりの植物も。客引きの駱駝乗りを断って脚で歩く。

翌日はシルクロードの「西域」玄関口の一つ、陽関へ。ガイドブックから「烽火台のみ」と想像して車で着くと、朱塗りの祠あり、みやげ物店あり、近くには森が連なる河があって二万人が住むという村落ありでびっくり。が、前方には果てしなくタクラマカンが広がる。中途半端なトレッキング感覚ではこの砂漠は越えられないな、と考え込む。ここから南へ、西へ駱駝で旅した古人を思いつつシルクロードへの夢が広がる。中国語では「絲綢之路」と書くそうだ。ここから張騫は西へ向かったのか、玄奘は行って来たのか、マルコポーロが向こうからやって来たのか。通ったのはあるいは北の玉門関か。



敦煌の街に戻る途中で西千佛洞、敦煌古城に寄る。西千佛洞も莫高窟と同時代の作品だが規模は小さい。痛みも激しい。が、飛天も弥陀もいる。西域入り口最初の仏像群だという。敦煌古城は映画「敦煌」のセット、それなりに面白い。見納めは街に戻って鳩摩羅汗の白馬塔と市博物館。夕食後、街中を散歩する。露店が道に並んでいる。駱駝の骨に彫った観音開きの釈迦三尊像を求めた。重みがあって濃い栗色の手触りも良い。シルクロードの思い出にシルクのスカーフも数点土産に買う。

帰途の西安で日立事務所の人と会い、イスラム教の清真大寺を訪ねて旅行は終わった。翌早朝、上海から名古屋に飛ぶ家内を西安空港で見送って私は北京経由でウィーンに向かった<sup>7</sup>。

<sup>7</sup> 体力の衰えか、定年後の旅行意欲に陰りを感じていた最近だが、敦煌へ来て気力が戻ってくる。心の問題なのか。意義深い一週間だった。

## 西安に書を楽しむ（一九九九年四月）

四月二十四日、北京精華大学での公務を終えて西安に飛んだ。西安、かつての長安への関心はかねてから高かった。訪れたいと長年思っていた<sup>8</sup>。「書」に関心を持ってから一層その気持ちが強かった。シルクロードの出発点でもある。二時間で到着。一時間後に名古屋から上海経由で到着の家内と合流してホテルへ。ガイドの「韓」さんが流暢な日本語で案内してくれる。

翌日は碑林博物館で時間をとった。別名、孔子廟堂。西安と言えば先ずは兵馬傭かも知れない。が、最初にここに来たかった。本でしか知らない王羲之や顔真卿、懐素といった名筆家の字を碑の形であるが直接目にできるのが嬉しかった。寺子屋で苦勞した臨書を思い出し、二ヶ月前のウィーンでの「書展」を思い起こす。見ていて飽きなかった。感動した。

「よくもこんなに」といった感じだ。「書きも書いたり、彫りも彫ったり」である。堅い石に彫るのだから、「一気に」とはいかない。が、その中に筆の勢いがはっきりと読める。二次元に書く字を、深さも加えた三次元に彫り込んだ碑。古くからの堅い字体、行草の流れるような字体。麗泉さんを思わず律義に並んだ多くの字<sup>9</sup>、私が好む大字。こんな字が書けたらと誰もが思うだろう。こんな字を彫りたい、とも思った。一室では「拓」の実演中。かつて中学の版画の実習でだったか、使



ったパテ（？）のような拳大の布の塊に墨を含ませて碑の上当てた紙をパタパタと叩く。絵が、字が浮き出てくる。全紙大の拓本だ。達磨図もあったが、字遊びをしたような面白い構図の拓本を購入した。「魁星点斗 清」。この拓本は今も居間の壁で目を楽しませてくれる。

翌日訪ねた大雁塔では「大唐三蔵聖教序」碑文の実物を目にした。ちょ遂良の字で多くの教材になっているものだ。対の「大唐三蔵聖教序記」は修復中なのか見ることができなかった。玄奘の建てた塔だけに内部には彼の持ち帰った經典や仏像が多い。馬二十二頭で運んだというから相当なものだ。それらに並んで彼自身を描いた負笈図が興味をひいた。二宮尊徳のように背に荷を担ぎ、脚半をつけて、手には本ではなく托鉢用具らしい鈴（？）を持つ。塔内の階段を登り切ると周囲の光景が奈良を思わせた。平野が広がり、その中に緑、家並み、寺院。

その日は始皇帝の兵馬傭、半坡遺跡、楊貴妃の華清地も訪ねた。兵馬傭に思ったほど息を呑まなかったのは、実物一体をウィーンで見えていたからか、あまりに予備知識が多く期待が強すぎたからか。それでも、広い建物内によくこれだけのものを、と感心した。表情が生きている。生身の兵隊に見える。時間をかけての丁寧な発掘、修復作業にも感心した。華清地の楊貴妃のお風呂はまるで水泳プール。玄宗皇帝との甘い生活、と言われ、「傾城の美女」と言われるが、賢い女性でもあったのだと思う。名君との評価もある玄宗皇帝が、単なる「美形」だけで溺れるとは思えない。知的にも引かれるところがあったに違いないと想像する。最後はその妃を自らの命で断罪せざるを得なかった皇帝は辛かっただろうと同情。翌日の郊外

<sup>8</sup> 十年ほど前、夏休みの旅行計画を直前で取り消した思いが苦く蘇る。「鬱」状態で気力が萎えていた。

旅行で訪れた楊貴妃の墓地は意外にこぢんまりとしていた。道端の一角に、土まんじゅうプラスアルファ程度の墓だった。小さいけれど、華やかな雰囲気があって暗い感じはなかった。



その郊外旅行ではシルクロードの起点を通して幾つかの王墓を訪ねる。乾陵、茂陵はさしずめハイキングだ。それほど大きい。乾陵前の休憩所で「泥人形」を求める。小さくてかわいいセット。昔、万里の長城の店で手に入れ、知り合いに一個ずつ配って喜ばれた。霍去病の墓地もあった。これは庭園だ。石刻の動物像が面白い。馬、虎、蛙、牛等等。小高い楼に登ると緑の平野が広がる。「あの河の向こうの村が私の実家」と韓さん。夜は鐘楼隣にある西安名物の餃子店へ。

最終日は興慶宮公園を歩き、阿倍仲麻呂像、楊貴妃像を見、遊びまわる現代の幼児や小学生らしい群れに会う。韓さんは準備した予定のコースが変更になってもにこやかに付き合ってくれた。城壁の上を散歩してから空港に向かう。いよいよ敦煌への旅である。

敦煌から帰途に再度立ち寄った西安で日立事務所の人と会い<sup>10</sup>、イスラム教の清真大寺を訪ねた。礼拝の最中だった。中国でイスラム寺院を見るのも予想外だったが、「人」のモビリティ、「心」のペネトレーションを強く感じた。人はどこに住んでも、自分の心の寄るべき「よすが」が要るのだ。それは何なのだ。はっきりとは分らないけれど、何かが必要なのだ。私自身も、いずれは日本に帰るのだ、落ち着きを感じるのは日本であり、日本の文化であり、日本での人との交流であり、日本の自然なのだと思う。海外を旅し、違う文化、別の歴史を垣間見て、結局日本に戻るのだなあ。それが自分なのだ。イスラムの人、クリスチアニティの人もそうなのだろう。どれだって、他より優れる訳でもないし、劣る訳でもない。

旅行は終わった。翌早朝、日本へ戻る家内を西安空港で見送って私は北京経由でウィーンに向かった。

<sup>9</sup> 実はその麗泉さんは三月末にこの碑林博物館を訪れている。

<sup>10</sup> 日立現役時代にも接点があった人達だが、立場を変えて外地で会うのは格別の思いだった。初めて会った家内だが、包容力のある人だと一目惚れしていた。